

平成27年度 地域づくり海外調査研究事業調査報告書

文化・芸術と社会包摂

調査地：フランス・パリ

調査日：平成27年6月27日～7月5日

一般財団法人 地域活性化センター

振興部 地域支援課

長門 宏紀

目 次

I はじめに 2～3

II パリにおける文化芸術 4～7

- ・リュクサンブール公園
- ・104（サンキャトル）
- ・その他

III おわりに 8～9

IV 参考文献 10

I はじめに

人口減少や高齢化によって、今後日本の地域社会が直面する困難は予測ができず、その全てに適切な予防や対策をしようとするのは非現実的だと考える。むしろ、困難に巻き込まれた人々には適切な助けがあると住民が広く認知し、安心して生活を営んでいくことのできる地域づくりをしていくことが必要である。

「社会的包摂」という考え方がある。対になる考え方は「社会的排除」であり、これは障がいや貧困、差別、国籍や人種など、ある種の差異を社会の負担だと認識し、社会活動への参画を不可能あるいは難しくしようとするものである。これに対し「社会的包摂」は、差異を受け入れ、共生できる社会をつくっていく。ある種の困難の中にある人々に、社会はあなたを見捨ててはいないと伝えられ、社会に参画する機会があり、困難の中にあることが社会参加を難しく、不利にすることのない社会である。こういった社会こそが、今後、予測不可能なあらゆる問題が発生する地域社会においても、住民が安心して生活できる社会である。

今回、海外調査の目的を「社会的包摂」をいかに日本の地域社会で実現するか考えることとした。そこでフランス・パリにおいて住民が文化・芸術をどのように受け入れ、その結果として当地がどのような雰囲気を持っているのかを確認した。それは「社会的包摂」と文化・芸術には強い関連があると考えられるためである。

「社会的包摂」と文化・芸術に関連があると考えられる理由は以下のとおりである。

①文化・芸術が生み出す価値に単一の評価軸がない

特に現代美術と言われる分野について、その価値にいわゆる「正解」がなく、こうしなければならないという強制感を感じずに人々が携わり、表現活動を行うことができる。受け取る人によって様々な評価があつていいのだという考え方は、あらゆる差異を受け入れる土壌になる。

②コミュニケーションを生み出すことができる

表現するということは、それを受け取る人がいるのでコミュニケーションを伴う。差異を認め支え合うには互いを知ることが必要であるから、適切なコミュニケーションは「社会的包摂」の実現に不可欠である。

③人々にアイデンティティと独自の価値判断の基準をもたらす

芸術に親しむことで、人々はアイデンティティと独自の価値判断を得ることができる。これらなしには、マジョリティのために設計された画一的・効率的な社会のあり方のみが正解であるとの認識が広がり、そこから外れた人々は社会の負担であり排除すべき存在だとされてしまう。

以上のことから、文化・芸術の振興は「社会的包摂」の実現に大きく寄与するものと考ええる。

なお、ここで言う文化・芸術とは概ね、日本の法律「文化芸術振興基本法」に示された以下のものを想定している。

- ・ 芸術（文学、音楽、美術、写真、演劇、舞踊その他の芸術）
- ・ メディア芸術
（映画、漫画、アニメーション及びコンピュータその他の電子機器等を利用した芸術）
- ・ 伝統芸能（雅楽、能楽、文楽、歌舞伎その他古来の伝統的な芸能）
- ・ 芸能（講談、落語、浪曲、漫談、漫才、歌唱その他の芸能）
- ・ 生活文化（茶道、華道、書道その他の生活に係る文化）
- ・ 国民娯楽（囲碁、将棋その他の国民的娯楽）
- ・ 出版物及びレコード等
- ・ 文化財等（有形及び無形の文化財並びにその保存技術）
- ・ 地域における文化芸術（地域固有の伝統芸能及び民俗芸能）

Ⅱ パリにおける文化芸術

先にも述べたが、今回のフランス・パリにおける調査では、文化・芸術に住民がいかに親しんでいるか、またその結果パリ市内はどのような雰囲気を持っているのかを見ることとした。

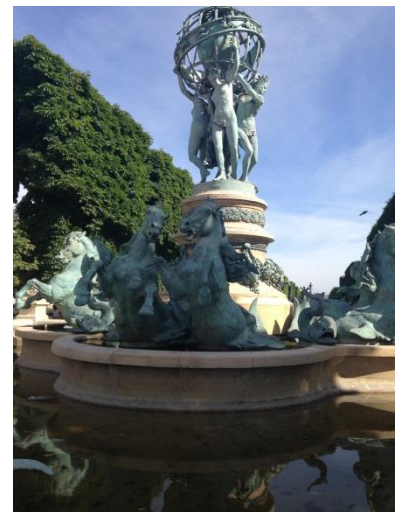
日本の地域社会をパリに近づけることを考えるのではなく、パリの優れた部分を調査し、日本の地域社会において「社会的包摂」の実現を目指す際の参考にすることが目的である。

●リュクサンブール公園

リュクサンブール公園はパリ 6 区にある。敷地の中には小さな売店などもあり、園内はたくさんの人々で賑わっていた。ベンチに寝そべって日焼けしている人もいれば、絵を書く人、仲間との会話を楽しむ人、なにもせずに座っている人もいた。パリ市民の憩いの広場といった風情だった。

何かをしてはいけないと利用法を制限する看板は見当たらず、利用に関しては各人の良識に委ねられているようだった。

園内には多数の非常に質の高い芸術作品が設置されており、園内を歩くだけでも豊かな芸術に触れることができた。



【リュクサンブール公園の様子】

公園内では、パリ市主催でピアノコンサートが開催されていた。聴衆のうちの一人に話を聞いたところ、公園にはピアノコンサートのために訪れたわけではなく、来てみたらたまたまコンサートが開催されていたということである。公園では頻繁に、このように芸術に関わりのある催しが開かれるということだった。



【ピアノコンサートの様子】

その他、園内にはギニョールという人形劇を上演するシアターもあった。ギニョールはもともと過酷な労働に追われる労働者向けの皮肉に富んだ内容だったが、現在は子ども向けの娯楽になっている。面白おかしい内容で子どもたちを楽しませると同時に、教育的要素も含んでいる。調査中もたくさん子どもたちで賑わっていた。



【ギニョールの劇場】

●104 (サンキャトル)

104 (サンキャトル) はパリの北部 19 区にある多目的文化センターである。もともとは市営の葬儀場だったが、閉鎖に伴い改装工事を経て文化施設へと姿を変えた。学芸員に話を聞いたところ、104 (サンキャトル) が立地するパリ 19 区はあまり治安がよくなかったものの、この文化施設が完成したころから改善されてきているそうである。失業率が高かった周辺の住民を職員として採用しているとのことだった。

施設にはアーティストのためのアトリエも用意されており、作品を発表する場であるだけでなく、制作の場にもなっている。時間によってアトリエに入ることもでき、アーティ

ストとコミュニケーションをとることができる。

施設の敷地内には日本の体育館のような大きなホールが 2 つ並んでおり、誰でも無料で入場できる。自由に利用できるキュリアル通り側のホールでは、多くの人々が各々の芸術活動を行っていた。絵を書く、ダンスを踊るなど表現方法は多種多様だった。管理者が常駐し、使われ方を監視している様子はなかった。



【ホール内部】

地下にある火葬場跡には段ボールで迷路がつくられており、施設の名物になっている。多くの子どもたちがこの迷路で遊ぶ姿を見ることができた。



【火葬場跡につくられた迷路】

104 では常に企画展が開催され、1 週間程度でその催しが入れ替わるそうである。訪れた

際はフランス映画に関する展示や、プロジェクターの光を活用した体験型の展示が行われていた。



【フランス映画に関する展示】



【体験型の展示】

●その他

パリの街中では建物の壁に落書きがされていたり、大道芸人がいたり、様々な人が街角で個性を主張していたが、街並みとの調和を感じるものだった。

また市内のマルシェでは品物の並べ方ひとつとっても色合いや見栄えが考慮されており、市民の美意識を感じる事ができた。



【街角の落書き】



【マルシェの陳列】

Ⅲ おわりに

フランス・パリにおける文化・芸術の扱われ方は、日本の地域社会とは大きく異なる部分があった。そうした在り様に至った原因は、当地の歴史や言語、社会制度など様々な要因があるものと推測するが、文化・芸術がその一端を担っているのは間違いないと感じた。その中でも、参考にすべきと考えたのは以下のとおりだった。

①場の使い方が利用者に委ねられている

パリ市内には、文化・芸術に触れられる場が数多く用意されているが、その場をどういうふうに活用するかは利用者に委ねられている。104（サンキヤトル）を例にとると、芸術活動を行いたい住民に無料で開放されているホールは、絵を書く場所、ダンスを踊る場所と区画されているわけではなく、監督者が常駐しているわけでもなかった。利用する人は他人の権利に配慮しながら、自らが行いたい表現活動を行っていた。

また、文化・芸術に関する施設に限らず、公園や広場など、市内のあらゆる場所を市民が自由に活用していた。活用方法はやはり、他人に迷惑をかけない範囲のあらゆることで、寝たり、踊ったり、会話を楽しんだりするなどだった。

このように、自由に場が使われている理由としては、場の提供者が利用方法を厳密に想定していないことで、その場を使う際の「正解」が存在しないためだと感じた。

こうしたあり方は、住民が多様な価値観を持つことを担保され、一人ひとりの人権が尊重され、価値観を認め合う社会づくりに資するのではないかと考える。

②文化・芸術が誰にでも触れられる状態で存在する

公園内に芸術作品が展示されていたり、同じく園内でコンサートが開催されていたりなど、美術館に限らず、公共空間において誰もが多様な文化芸術に触れることのできる環境が整えられている。

また市内の美術館の多くが、生活に困窮している人は無料、あるいは安価で入場できる制度を設けている。

こうした状態は文化・芸術へのアクセスを容易にし、あらゆる人々の芸術への感性を高めることに繋がる。

③社会のあらゆるところで文化・芸術を感じることができる

道端の落書きやマルシェでの商品の並べ方など、生活のあらゆる場面で美しいものを目にすることになる。

マルシェの陳列の仕方は特に、効率よりも見た目の美しさや楽しさが重視されていることが明白であり、文化・芸術が社会の中で重んじられていることがよくわかる。

以上がフランス・パリにおいて日本の地域社会の有りようとは異なる部分かつ、参考にすべきと感じたものである。パリにおいて芸術とは必ずしも高尚なものではなく、社会のあらゆる場所に存在し、経済状態や置かれた立場に関わらず誰もが触れることのできるものだった。

こうした部分を日本の地域社会にも取り入れることで、文化・芸術への親しみにより、多様な価値観が認められ、そしてあらゆる人間に配慮がなされた社会を実現したい。しかしパリで実感した美点を日本の地域社会に取り入れること、自治体として日本の地域社会が文化・芸術に親しむことを後押しするには、日本の自治体の政策形成において文化の役割が明確にされていないことが障害になる。

それ自体に価値があるのが文化・芸術であるが、自治体としては今後、文化・芸術の役割を「社会的包摂」の実現のため必要不可欠な要素として捉え、文化・芸術の軽視が住民の社会からの排除を招くことを肝に銘じ、多様な政策分野における文化の活用を検討・確立していくことが必要だと考える。

IV 参考文献

- 増淵敏之（2012）『路地裏が文化を生む！—細街路とその界隈の変容』青弓舎
- 中牧弘允・佐々木雅幸・総合研究開発機構（2008）『価値を創る都市へ—文化戦略と創造都市』NTT出版
- 吉川徹ほか（2014）『「地元」の文化力』河出書房新社
- 塩沢由典・小長谷一之（2008）『まちづくりと創造都市—基礎と応用』晃洋書房
- 佐々木雅幸・総合研究開発機構（2007）『創造都市への展望—都市の文化政策とまちづくり』学芸出版社